

弥生時代の食文化

弥生時代は、今から2,500年前～1,800年前までの期間で、水田稲作と畑作である農耕が中国大陆から日本列島に伝播しました。愛知県の発掘調査からも、水田遺構が見つっています。

1. やっばりお米から

弥生時代の遺跡で見つかる穀物で最も多いのがコメで、愛知県においてもゴミが捨てられた土坑(ゴミ穴)、井戸、溝などから炭化した状態で出土しています。弥生土器の甕(かめ)の内側の底付近には、コメを炊いた痕跡であるお焦げを確認できるものがあります。コメ作りをはじめとする農耕生活は縄文時代までの生活を一変させ、季節の移り変わりに伴うお祭りなどの新たな行事を生み出しました。



【一色青海遺跡から出土した炭化したコメ】



【煤けている外面】



【お焦げが付いている内側】

【朝日遺跡から出土した甕(あいち朝日遺跡ミュージアム所蔵、重要文化財)】

2. 季節の移り変わりとお祭

季節に伴う行事には、弥生時代の遺跡で見つかるマメ、アズキ、アワ、ヒエ、ソバなどの雑穀類も使われています。ハレの日(儀礼や祭)には、赤飯など特別な料理も作られたかもしれません。コメからは酒や餅も作られ、季節の節目などに飲食されたことでしょう。

弥生時代には主食としてのコメなどの穀類とは別に、モモ、ウメ、ヤマモモ、ウリ、エビズル(ブドウ類)などフルーツの種も出土しています。特にモモの実の中にある核は硬い木質であることから、遺跡から多く出土します。これらのフルーツは、弥生時代の木器や土器にみられる高杯などに盛られ、お祭りの場面や食卓に並ぶようになったことでしょう。



【モモの核】

【炭化したエビズル(ブドウ類)の種子】

【一色青海遺跡から出土した種】

3. 河の恵み

朝日遺跡(清須市・名古屋市区)をはじめとする弥生時代の遺跡においても、縄文時代から続くマガキ、ハマグリ、ヤマトシジミ、アカニシ、マダイ、スズキ、イワシなどの海の幸とシカ、イノシシなどの陸の幸が多く見つっています。また、集落周辺に営まれた水田稲作をはじめとする生活では、近くの河や用水、水田などの淡水域の利用も広がりました。集落の近くでは、ウナギ、ナマズ、アユ、コイ、フナ、ドジョウなどの川魚、オオタニシ、クロダカワニナ、カワニナなどの貝類、水田や畑の作物を食べる虫を捕食するスズメ、キジ、カモなどの鳥も捕まえて、食べられていました。

弥生時代の食文化には、農耕生活にともなう河の恵みが大きく加わったのです。



写真左から「ウナギ属腹椎」「ナマズ属腹椎」「アユ尾椎」「コイ科咽頭骨」「オオタニシ」「クロダカワニナ」「カモ亜科中手骨」「ツル科上腕骨」

【朝日遺跡から見つかった河の恵み】



(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802-24
TEL:0567-67-4163 FAX:0567-67-3054



HP <http://www.maibun.com> Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

愛知まいぶん

